

ルポ 貧困女子

もはや女性を取り巻く問題は、「男女格差」、「仕事と家庭の両立」といった言葉では語れない。男女雇用機会均等法を始め様々な制度が浸透してきたことによってキャリアも子どもも夫も手にいれた、いわゆる「輝いている」女性がいる一方で、仕事も短期パートを転々、子どもどころか結婚も現実的な見込みがなく、生活苦にあえぎ、孤立感と将来の不安に慄いている女性もいる。このように女性間の格差が広がる中、メンタルの問題を抱える女性も増加しているという。本書は、そのような女性たちに丁寧こまごまに寄り添いながら取材を続けた著者の渾身の作である。

非正規労働や、ワーキングプア、引きこもりといった現代の相対的貧困の現状は、男性の例を念頭において語られることが多い。女性は過去にも経済的に不利であったが、貧困の状況まで追い込まれる女性は確実に増えている。労働市場における男女格差が解消されず、両立支援が不十分なまま、未婚化と労働市場の劣化が進み、女性たちは最低限の生活を保つことさえできなくなってきている。そんな中、終章の「一筋の光を求めて」には、まさに希望の糸口を見出すことができる。今こそ、「女性が子どもを産むこと」を支援するのではなく、女性自身が人間らしく生きることを支援する政策が必要なのだ。

あべ あや
阿部 彩 (首都大学東京都市教養学部教授)



- 飯島 裕子 著
- 岩波書店
- 2016年初版
- 820円(税別)

相 対 的 貧 困

貧困には、大きく分けて絶対的貧困と相対的貧困という二つの概念がある。絶対的貧困とは、どのような時代や社会においても変わらない基準を用いて貧困を判断する概念であり、肉体的生存さえも不可能な生活レベルをいう。対して相対的貧困とは、その社会、その時代において大多数の人々が通常経験する生活が送れない状況を指す。現代の日本社会では、学校に行く、仕事をする、親戚の冠婚葬祭に出席するといった「当たり前」の生活である。先進諸国においては、相対的貧困概念を用いて貧困を測定するのが一般的である。

ルポ 保健室

——子どもの貧困・虐待・性のリアル——

養護教諭経験のない人が、ここまで養護教諭や保健室の子どもたちのことを深くつかみ適切に表現されている本はない。一般的には「養護教諭」はどこにいて、どのような仕事をしているのか知らない人が多い。本書は、保健室を訪れる子どもたちと、養護教諭との交流を軸にしなが、今日の子どもの問題をはき出してきている。著者の鋭い観察力と、豊かな表現力、そして問題の背景を深くつかむための取材力には感服する。今日の子どもたちが置かれている深刻な状況や、養護教諭の思いがひしひしと伝わってくる。

経済格差が進み、「貧困」は社会的弱者である子どもたちに真正面から襲いかかる。本書にも「給食が命綱」として登場してくる子どもがいるが、食だけでなく、虐待、性、不登校と、保健室から社会の問題がよく見えてくる。

著者は、6年間にわたり保健室を取材された。子どもや、その子どもを受け止める養護教諭の様子が実にリアルに表現されている。しかも、それを見ている著者の眼差しは実にあたたかい。保健室・養護教諭の存在と、そこを訪れる子どもたちが抱えている問題が本書を読めば、誰にでも手に取るようにわかる。

この書が社会に出たことで、子どもたちの問題やその問題と日々向き合っている養護教諭の仕事に対する理解が広がることを期待している。

しほ すみ
尖戸 洲美 (帝京短期大学生活科学科教授)



- 秋山 千佳 著
- 朝日新聞出版
- 2016年初版
- 780円(税別)

養 護 教 諭

「保健室の先生」、こう呼ばれることが多い。しかし、正式には「養護教諭」という。養護教諭の前身は学校看護婦であり、欧米諸国とほぼ同じ時期(1900年初頭)に、伝染病の予防対策として学校に派遣された。欧米諸国がそのまま学校看護婦(スクールナース)として今日まで続いているのに対し、日本は教育職員としてその身分を発展させてきた。しかも、常勤職員としてほぼすべての学校に配置されている。養護教諭は教師であり、保健室を基地にしながら、子どもたちの健康を守り発達を支援する仕事をしている。

兵士のアイドル

——幻の慰問雑誌に見るもうひとつの戦争——

アジア・太平洋戦争期、戦場の兵士たちを励ますための雑誌が存在した。海軍をバックとした慰問雑誌『戦線文庫』や陸軍の『陣中倶楽部』などがそれである。そうした雑誌の表紙やグラビア頁を飾ったのは、映画や舞台、さらには花柳界などで活躍していた女性たちであった。銀幕のスター、大衆劇場であるムーラン・ルージュ新宿座の人気者、宝塚や松竹の歌劇団の少女たち。ときには、「閨秀作家」と呼ばれた美人文学者たちが戦地に赴くこともあったし、当時新人歌手であった森光子も慰問団に加わっている。

本書は、そうした「兵士のアイドル」たちのあり方とその受容のされ方を、これまであまり顧みられてこなかった慰問雑誌を丹念に練ることで、鮮やかによみがえらせた労作である。戦意高揚のプロパガンダに関しては、どうしても勇ましい調子のもものばかりが目につき、またもっぱら男性の知識人・文化人・芸術家などの戦争協力について議論が集中しがちであった。

そうした中、脇役に追われがちな芸能界の女性たちの果たした役割に、スポットライトが当たったことの意義は大きい。アジア・太平洋戦争の記憶が薄れつつある現在、こうした地道な掘り起こし作業は急務と言えるだろう。

なんば こうじ
難波 功士 (関西学院大学社会学部教授)



- 押田 信子 著
- 旬報社
- 2016年初版
- 2,200円(税別)

アイドル

アイドルの語が日本に定着したのは、1960年代以降であり、その活躍の場はもっぱらテレビ番組だった。現在、アイドルの活動の中心はライブへと移行しているが、20世紀に関していえば、アイドルはテレビなどマスメディアの産物であった。この間、男性・女性のアイドルが数多くデビューしてきたが、不思議なことに女性アイドルに女性ファンがつくことはあっても、男性アイドルを男性が公然と応援することはあまりない。こうした非対称性にも、男性の間に根強く存在する「ホモフォビア(ホモセクシャルへの忌避)」が見え隠れしている。

データでみる スポーツとジェンダー

スポーツは、学校教育、生涯スポーツ、競技スポーツ、メディア、ビジネスなど多面的に社会のジェンダー構造に関わっている。2020年東京オリンピック・パラリンピックを巡って、女性選手や障がいのある選手の活躍にも注目が集まり、男女平等や多様性の尊重において先進的とも見えるスポーツの状況がある。本書は、それが本物なのか、虚像なのかデータを駆使して問いかけている。

歴史、競技、生涯スポーツ、リーダーシップ、教育、研究、メディア、暴力・ハラスメント、セクシュアリティの9章から構成され、どの章も男性中心に発展してきたスポーツへ女性が参画することの難しさを示唆している。女性参加への扉は開かれても、リーダーシップへは鉄の扉が存在する。暴力やセクシュアル・ハラスメントなど深刻な人権侵害はスポーツ文化に内在する構造的な問題であること、セクシュアリティについては、性別二元制に伴う性別確認検査や異性愛主義がもたらす同性愛嫌悪など近代スポーツの土壌を端的に説明している。

本書は日本スポーツとジェンダー学会による『スポーツとジェンダー データブック2010』の後継書であり、若手の研究者が中心となって執筆・編集をした。数量データで語る限界がコラムや年表、情報源などで補強され、この書を核に掘り下げることができる。

いたに けいこ
井谷 恵子 (京都教育大学体育学科教授)



- 日本スポーツとジェンダー学会 編著
- 八千代出版
- 2016年初版
- 2,500円(税別)

性 別 確 認 検 査

競技スポーツは男女別を基本とするため、公平性の担保を理由に性別確認検査が行われてきた。視認による外性器検査や染色体検査、テストステロン(男性ホルモン(一種))のレベル検査などが導入されたが、性別の複雑さのためにいずれの方法にも限界がある。

このため、性分化疾患や高アンドロゲン症などによって資格を剥奪される女子選手が相次ぎ、深刻な人権問題の種となっている。オリンピックでは2000年のシドニー大会から全女子選手を対象とする性別確認検査が廃止されたが、その後、高アンドロゲン症規定が新たに設けられ、疑いを持たれた選手に対し、個別に対応することになった。